

馮夢竜『情史』抄訳

広島大学漢文研究会では、毎年所属学生の希望に応じて、さまざまな時代や地域の漢詩や漢文を読み進めてきた。平成二十六年からは、中国の恋愛に関する詩文を読みたいという希望があり、明の馮夢竜が編纂したとされる『情史』二十四巻を読み始めた。『情史』は『情史類略』『情天寶鑑』とも呼ばれ、歴代の史伝や説話、文言小説等から情愛に関する約九百話を集め、二十四巻二十四類に分類配列した書物である。本文は編者によって改作されたところもあり、一部の作品には話末に評語が付されている。

研究会では、当時大学院生であった世良昂君と松田僚平君が『情史』の解説を担当し、二十四類の各類がそれぞれどのような内容なのかを学部生に向けて紹介した。その解説と内容の紹介を踏まえて、各自が興味ある類から話を一つ選んでレジュメを作成し、平成二十六年四月から平成二十七年三月までに十数話を読み進めることができた。中には有名な話もあるが、まだ邦訳のない話も多く、また話末の評語は独自の観点から各話を読み解こうとしており、漢文の教材としても活用できそうな話も多かった。そこで担当者が発表資料をもとに草稿を作成し、それを佐藤がとりまとめて修正した上で、本誌上で報告することとした。担当者の原稿は昨年度には揃っていたが、佐藤のとりまと

め作業が遅くなった為、本号の掲載となったことをお許し願いたい。

資料作成にあたって、本文の底本には明末東溪堂刻本を用いた春風文芸出版社排印本（一九八七）を用い、明刊本二種を校合したとされる古本小説集成所収本及び清・芥子園蔵本を用いた岳魯書社排印本（一九八六）を参照した。

各話は、【本文】【書き下し文】【語注】【現代日本語訳】【補説】【参考】の順に構成している。【本文】【書き下し文】には新字を用い、また【書き下し文】は旧かな・歴史的仮名づかいとした。【補説】はそれぞれの話の特色や気づきをまとめ、その話の出典や類話に分かる場合にはその相違について言及した。ただ全ての話において出典を確かめてはいないので、その点にはご留意いただきたい。【参考】には出典や類話の（本文）（書き下し文）（現代日本語訳）を挙げた。

本資料の作成に関わった広島大学漢文研究会の構成員は以下の通りである。（五十音順）

井手尾 侑美	糸山 由樹	梅 誠士郎	是友 諒介	柴田 早侑里
柴田 深月	世良 昂	田中 美帆	田村 俊樹	野仲 麻里
錦織 友洋	松田 僚平	村上 真麻	森永 遼介	

（佐藤大志記）

この話のもと『搜神記』に見える。語注にも一部示したように文字の異同がいくつかあり、特に男が去る場面は、『搜神記』とは異なっている。『搜神記』では、「忽掩其衣裾戸間、掣絶而去」、『情史』では「奄忽執其衣裾、戸開、掣絶而去」となっている。『搜神記』は、夫の衣の裾が「戸間」に挟まってそれを引きちぎって脱出したとなっているが、『情史』では、「執」の主語が定かではないものの、恐らく妻が夫の裾を突然掴んで引き留めようとしている、と読み取ることができる。そして、その時に戸が開き、夫は裾を引きちぎって脱出するのである。

『情史』の当該箇所は、主語の省略などもあって文意が通じにくくなっており、伝写の間の誤写である可能性もあるが、「奄忽執其衣裾、戸開、掣絶而去」は、『搜神記』のように偶然に戸に裾が挟まれたのではなく、何らかの力が夫を冥界に引きとどめようとしたときに、戸が開き、彼は冥界から危うく脱出したかのように読める。

【参考】『搜神記』 宮陵道人

(本文)

漢北海宮陵有道人、能令人与已死人相見。其同郷人、婦死已数年、聞而往見之。曰「願令我一見亡婦。死不恨矣。」道人曰「卿可往見之。若聞鼓声、即出勿留。」乃語其相見之術、俄而得見之。於是与婦言語、悲喜恩情如生。良久、聞鼓声恨恨、不能得住。当出戸時、忽掩其衣裾戸間、掣絶而去。至後歳余、此人身亡。家葬之、開塚、見婦棺蓋下有衣裾。

(書き下し文)

漢の北海の宮陵に道人有り、能く人をして已に死する人と相ひ見はしむ。其の同郷の人、婦死して已に数年、聞きて往きて之に見ふ。曰はく「願はくは我をして一たび亡き婦に見はしめよ。死するも恨まず」

と。道人曰はく「卿往きて之に見ふべし。若し鼓声を聞かば、即ち出でて留まること勿れ」と。乃ち其の相見の術を語るに、俄にして之に見ふを得たり。是に於て婦と言語するに、悲喜恩情生くるが如し。良久しくして、鼓声の恨恨たるを聞き、住まるを得る能はず。戸を出づる時に当たり、忽ち其の衣裾を戸間に掩めば、掣絶して去る。後歳余に至り、此の人身亡す。家は之を葬るに、塚を開けば、婦の棺蓋の下に衣裾有るを見る。

(現代日本語訳)

漢の北海の宮陵に道士がおり、生者と死者とを会わせることができた。その同郷の人が、妻を亡くして数年後、その話を聞いて道士に会いに行つた。言うには「どうか私を一度だけ死んだ妻に会わせて下さい。それで死んでしまつても思い残すことはありません」と。道士は言つた「それでは会いにお行きなさい。もし太鼓の音を聞いたら、すぐに出てきて絶対に留まることの無いように」と。そこで会うための術を語ると、死んだ妻に直ぐに会うことができた。そこで妻と語り合つたが、悲しみや喜びの情は生きていた時と変わらなかつた。暫く経つて、太鼓の音が恨めしく響き、留まることが出来なかつた。扉を出る時にあたり、不意に衣服の裾が扉の間に挟まってしまったので、引きちぎつて去つた。後一年あまりして、この人は亡くなつた。家族がこれを葬ろうとして、墓を開くと、妻の棺の蓋の下に衣服の裾が挟まっているのが見えた。

〔参考文献〕森野繁夫・先坊幸子『干寶 搜神記』(白帝社二〇〇四)

(錦織 友洋)

②『情史』巻十 情靈類 第八話「干宝」

【本文】

晋干瑩為丹陽丞。有寵婢、妻甚妬之。及瑩亡、葬之、遂生埋婢于墓。瑩子宝兄弟尚幼、不知也。

後十余年、瑩妻死、開墓、而婢伏棺上如生。載還、經日乃蘇。言、「干郎飲食我、一如生前。地中亦不覺為惡。」既而嫁之、生子、更活数年。

子猶氏曰、「生理婢、本舒其生前之妬也。豈知反為彼結地下之縁耶。雖然、嫗葬而婢出、則嫗之妬終遂矣。異哉。」

【書き下し文】

晋の干瑩は丹陽の丞たり。寵婢有りて、妻は甚だ之を妬む。瑩の亡するに及び、之を葬るに、遂に生きながら婢を墓に埋む。瑩の子宝の兄弟は尚ほ幼くして、知らざるなり。

後十余年、瑩の妻死し、墓を開くに、婢の棺の上に伏すること生くるが如し。載せて還るに、日を経て乃ち蘇る。言ふ、「干郎が我に飲食せしむること、一に生前の如し。地中なるも亦た悪と為すを覚えず。」と。既にして之に嫁ぎ、子を生み、更に活ること数年なり。

子猶氏曰はく、「生きながら婢を埋むるは、本より其の生前の妬みを舒ぶるなり。豈に反つて彼の為に地下の縁を結ぶを知らんや。然りと雖も、嫗葬られて婢出づれば、則ち嫗の妬みは終に遂げり。異なるかな。」と。

【語注】

「干瑩」…干宝の父。

「丹陽」…県名。現在の安徽省当塗県。

「丞」……官名。行政府長官の副官。

「寵婢」……寵愛を受けている身分の低い女性。

「干宝」……生没年不詳。東晋の人。陰陽術数を好み、神怪靈異の話を収集して『搜神記』を著した。

「郎」……婦人が夫あるいは恋人に呼びかける語。

「子猶」……馮夢竜（一五四一—一六四五）の号。明末の通俗文学界の第一人者。編纂・補訂・編集・出版など幅広い事業を行った。

「舒」……ここでは、晴らすの意味。

【現代日本語訳】

晋の干瑩は丹陽の丞となった。夫には寵婢がいたので、妻は非常に婢を妬んでいた。瑩が亡くなって、彼を葬るときには、こともあろうか生きたまま婢を墓に埋めてしまった。瑩の子の宝ら兄弟は、まだ幼かったのでこのことを知らなかった。

十数年後、瑩の妻が死んだので、墓を開くと、婢が棺の上に伏しており、生きていたようであった。そこで車に載せて帰り、数日すると（彼女は）蘇生した。（蘇生した婢が）言うことには「干瑩様が私の飲食の世話をしてくださり、それはまったく生きていた時と同じでした。土の中ではありましたが、不快なことはありませんでした」と。その後、（その婢は）よその家に嫁いで、子どもを生み、さらに数年生きた。

子猶氏が言うことには、「生きたまま婢を埋めたのは、本来は生前の妬みを晴らすためであった。どうして却つてそのことが地下の縁を結ばせることになるか（妻は）わかっていただろうか。とはいえ、妻は死して葬られて婢が墓から出されたのだから、妻の妬みはようやく遂げられたのだ。不思議なことだ。」

【補説】

この話は、干瑩の妻が夫の婢に嫉妬したことが事件の発端となって

いる。婢が墓の中で十数年も生きながらえていたという話だけでも、十分「異」なことであろう。

しかし、子猶氏が「異」とするのは、死者が生き返ったということではない。彼が「異」とするのは次の二点である。一点目は、妻が、婢への復讐のつもりで生き埋めにしたにもかかわらず、結果として墓の中で夫と婢が結ばれるきっかけをつくってしまったということ。二点目は、自分が死んで墓の中に入り、婢を墓の中から追い出すことで、夫と婢の関係を断ち切ったということである。夫と婢を引き離そうとした妻の策略は、思いもよらぬ結果となり、一見失敗したかのように思える。しかし妻は死んで葬られる時に、婢を墓から追い出すことができ、彼女の嫉妬心はここでようやく晴らされたのである。

(井手尾 侑美)

③『情史』巻十五 情芽類 第三話「孔子」

【本文】

或問、「孔子有妾乎。」觀孔叢子載、宰予對楚昭王曰、「夫子妻不彫彩、妾不衣帛。車器不彫、馬不食粟。」據此、則孔子亦有妾矣。

人知惟聖賢不溺情、不知惟真聖賢不遠于情。

【書き下し文】

或ひと問ふ、「孔子妾有るや」と。孔叢子の載するを觀るに、宰予楚の昭王に対して曰はく、「夫子の妻は彩を服さず、妾は帛を衣^きず。車器は彫^{かざ}らず、馬は粟を食らはず」と。此に据れば、則ち孔子も亦た妾有らんや。

人は惟だ聖賢のみ情に溺れざるを知り、惟だ真の聖賢の情に遠からざるを知らず。

【語注】

「妾」……正妻以外の妻。そばめ。めかけ。

「孔叢子」……書名。孔子及びその一族に伝わる言行録集成の書。『漢書』にも書名がなく、内容も雑駁とされていることから、魏晋のころの偽作とされる。

「楚昭王」……春秋時代の楚の王。前五六一前四九九年に在位。

「宰予」……孔子の弟子。十哲の一人。字は子我。宰我とも。弁舌に優れた。

「帛」……絹織物の総称。当時は高価なものだったと考えられる。

「車器」……主に馬車の各部分の末端やへりなどを飾るために用いたもの。華麗な文様で飾られている。

「彫」……とりつくろって飾る。

「粟」……穀類の総称。帛と同様に高価であったと考えられる。

「亦く矣」……反語の意味。転じて詠嘆を表す。ここでは驚きのニュアンスを含んだものとして用いられている。

【現代日本語訳】

ある人が尋ねた、「孔子には妾がいたのでしょうか」と。『孔叢子』に載せられた記事を見ると、宰予が楚の昭王に向かって「先生の妻は色のついた服を着ず、妾は絹で作られた服を着ず、車器はとりつくろって飾ることもせず、馬は粟を食べません」と言ったとある。これに従うと、孔子にも妾がいたので。

人は、聖人や賢人だけが愛情に溺れることがないと分かっているけれども、本当の聖人や賢人だけが愛情を遠ざけないということは分かっている。

【補説】

この話は、『孔叢子』に「孔子には妾がいた」という記事があることを確認し、そこから聖人や賢人の情愛の話へと続いてゆく。前半では、孔子には妾がいたことを『孔叢子』の記述をもとに述べている。

「孔子亦有妾矣」と驚きのニュアンスをもって結ばれており、孔子に妾がいたことを、語り手は意外なこととして受けておられることが分かる。

これに対して、後半の評に当たる部分では、聖人や賢人の情愛に対する態度について述べている。聖人や賢人は、愛情に溺れることのない人物であるとは一般的に認知されているが、真の聖人や賢人は情愛を遠ざけ避けたりするのではない（むしろそれに近づく）ものだと述べられている。

（森永 遼介）

④『情史』巻十九 情疑類 第二十九話「漢女」

【本文】

鄭交甫常游漢江、見二女。皆麗服華裝、佩両明珠、大如荊鷄之卵。交甫見而悦之、不知其神也、下請其佩。二女手解佩以与交甫。受而之懷、行數十歩、視懐空無珠、二女忽不見。

漢女解佩、未及于乱、而後世遂以為風流話柄、何耶。

【書き下し文】

鄭交甫常て漢江に遊び、二女を見る。皆麗服華装し、両の明珠を佩するに、大なること荊鷄の卵のごとし。交甫見て之を悦び、其の神なるを知らず、下りて其の佩を請ふ。二女手づから佩を解きて以て交甫に与ふ。受けて之を懐にし、行くこと数十歩、懐を視るに空しくして珠無し、二女忽として見えす。

漢女佩を解くも、未だ乱に及ばざるに、後世遂に以て風流の話柄と

為すは、何ぞや。

【語注】

「鄭交甫」……事跡未詳。周の人とされる。

「漢江」……河川名。漢水。陝西省西部に源を發して東に流れ、湖北省の漢口で長江に注ぐ。

「佩」……腰に様々な形のたまをいくつか下げ、歩けば触れ合つて音を立てるようにしたもの。とくに女性の場合、それを解いて男性に贈るのは、心を許したしるしとなる。

「明珠」……光る珠。宝珠。「珠」は真珠。

「荊鷄」……越鷄。南国生まれの鳥。クジャク。

「乱」……正常でない男女関係。

「風流」……男女間の情事。

「話柄」……談話のたね。話のもとになる内容。

【現代日本語訳】

鄭交甫がかつて漢江に行ったとき、二人の女性と出会った。彼女たちは皆麗しく華やかに着飾っており、その腰もとははふたつの真珠を帯びていたが、それはまるで孔雀の卵のように大きかった。交甫は彼女たちに惚れてしまい、彼女らが神女であることを知らずに、下りて行って彼女たちに佩び玉を求めた。二人の女性は自ら佩び玉の紐を解き、交甫に与えた。彼は受け取ってそれを懐に抱き、行くこと数十歩、懐を見ると空っぽで真珠はなくなっており、（ふり返ると）二人の女性はたちまち見えなくなっていた。

漢水の女性は佩を解いただけであって、まだ男女関係に至っていないにもかかわらず、かくて後世に恋愛話のたねとなっているのは、いったいなぜなのだろう。

【補説】

この話の古い出典は前漢・韓嬰による『韓詩内伝』であり、『文選』に収録される郭璞「江賦」の李善注に引用されている。また同じく前漢の劉向の『列仙伝』に載せる「江妃二女」もこれと類似した話を扱っている。どれも同様に、鄭交甫という男性が二人の神女と出会い、神女とは知らずに佩玉を請うて受け取るが、やがてその佩玉と神女が忽然と消えてしまう、という筋の物語である。

さて、『情史』の「漢女」において注目すべき点は、この「漢女解佩」の話が恋愛話における話の元ネタとして用いられることに、評者の疑問が呈されている点である。「江妃二女」が『詩経』周南「漢広」の「漢有遊女 不可求思」（漢に遊女有り、求思す可からず）を故事の末尾に引いていることから明らかのように、この話は、男女関係の成立しないことを書いた物語である。

さらに「江妃二女」と「漢女」を比較すると、「漢女」には鄭交甫が女性を口説く場面もほとんど描かれておらず、「漢女」は男女関係を想像させる要素をあえて排して書かれているように読める。

【参考】

○前漢・韓嬰『韓詩内伝』（郭璞「江賦」『文選』李善注所引）

（本文）

韓詩内伝曰、鄭交甫遵彼漢阜台下、遇二女、与言曰「願請子之珮。」二女与交甫、交甫受而懷之、超然而去十步、循探之、即亡矣。迴顧二女亦即亡矣。

（書き下し文）

韓詩内伝に曰はく、鄭交甫彼の漢阜の台下に遵ひ、二女に遇ひ、与に言ひて曰はく「願はくは子の珮を請はん」と。二女交甫に与へ、交

甫受けて之を懷にし、超然として去ること十歩、循ひて之を探るに、即ち亡し。迴顧すれば二女も亦即ち亡し。

（現代日本語訳）

韓詩内伝には次のように言う、鄭交甫はあの漢阜山の楼台のふもとを過ぎゆくに、二人の女性と出会い、彼女たちに「どうか貴方の佩玉を頂けませんか。」と語りかけた。二人の女性は佩玉を交甫に与え、交甫はそれを受け取って懷に収めて、超然として去ろうとして十歩進み、懷を探ってみると佩玉は無くなっていた。振り返ってみると二人の女性もいなくなっていた。

○漢・劉向『列仙伝』「江妃二女」

（本文）

江妃二女者、不知何所人也。出遊於江漢之湄、逢鄭交甫。見而悅之、不知其神人也。謂其僕曰「我欲下請其佩。」僕曰「此間之人、皆習於辭。不得恐懼悔焉。」交甫不聽、遂下与之言曰「二女勞矣。」二女曰「客子有勞、妾何勞之有。」交甫曰「橘是柚也、我盛之以筥。令附漢水、將流而下。我遵其旁、采其芝而茹之。以知吾為不遜也。願請子之佩。」二女曰「橘是柚也、我盛之以筥。令附漢水、將流而下。我遵其旁、采其芝而茹之。」遂手解佩与交甫。交甫悅受而懷之、中当心趨去、数十歩視佩、空懷無佩。顧二女、忽然不見。詩曰「漢有遊女、不可求思。」此之謂也。

（書き下し文）

江妃の二女は、何所の人なるかを知らざるなり。江漢の湄に出遊し、鄭交甫に逢ふ。見て之を悦ぶも、其の神人なるを知らざるなり。其の僕に謂ひて曰はく「我下りて其の佩を請はんと欲す」と。僕曰はく「此の間の人、皆辭に習ふ。得ざれば恐らくは悔いに罹らん」と。交甫聽

かず、遂に下りて之と言ひて曰はく「二女勞れたり」と。二女曰はく「客子勞有り、妾何の勞か之れ有らん」と。交甫曰はく「橘は是れ柚なり、我之を盛るに筈を以てす。漢水に附し、將に流れて下らんとせしむ。我其の旁らに遵ひ、其の芝を采りて之を茹ふ。以て吾が不遜たるを知るなり。願はくは子の佩を請はん」と。二女曰はく「橘は是れ柚なり、我之を盛るに筈を以てす。漢水に附し、將に流れて下らんとせしむ。我其の旁らに遵ひ、其の芝を采りて之を茹はん」と。遂に手づから佩を解きて交甫に与ふ。交甫悦びて受けて之を懐にし、中て心に当てて趨り去るも、数十歩にして佩を視れば、空懐にして佩無し。二女を顧みるに、忽然として見えず。詩に曰はく「漢に遊女有り、求思すべからず」と。此れを之れ謂ふなり。

(現代日本語訳)

江妃の二人の娘は、どこの出身かわからない。漢水の岸边へ出かけて行って歩き回るうち、鄭交甫に出会った。交甫は二人を見かけて惚れ込んだが、相手が神人だとは知らなかった。そして下僕に「私は下りて行って、あの娘の佩玉をもらおうと思う」と言ったが、下僕は「この辺りの人は、みな男女のやりとり慣れております。もらえないと、たぶん後悔するような目に遭うでしょう」と言った。しかし交甫は聞き入れず、そのまま下りて行って娘に話しかけた。「二人の娘さん、お疲れでしょう」。二人の娘は答えた。「旅人のあなたがお疲れでしょう、私たちには何も疲れることはありません」。交甫は「橘は柚です。私はそれを箱に入れました。漢水に浮かべ、流れ下らせようと思ひます。私はそのそばをついて行き、その芝を採って食べましょう。私が大それた望みを持ったことはわかっております。でも、どうかあなたの佩玉をいただきたい」というと、二人の娘は「橘は柚です。私はそれをざるに入れました。漢水に浮かべ、流れ下らせようと思ひま

す。私はそのそばをついて行き、その芝を採って食べましょう」と答え、佩玉をほどこいて交甫に渡した。交甫は喜んで受け取り、懐に入れ、ちよほど胸の中央に置いて小走りに去ったが、数十歩行ってから佩玉を見ようとすると、懐中は空で佩玉はなかった。二人の娘を振り返れば、ふっと見えなくなってしまった。詩に「漢水には出歩いている娘がいるが、言い寄ってはいけない」とあるのは、このことをいっただものである。

〔参考文献〕前野直彬『山海経・列仙伝』（集英社全釈漢文大系 一九七

五）

（田村俊樹）

⑤『情史』巻十九 情疑類 第四十八話「延寿司」

【本文】

姑蘇衛人王宗本、行賈于汴。抵夜、而有美女入室与狎。詢其居止名氏、終不言。久而成疾、疑為妖也。俟來時、以黒油塗其面、女泣去。

旦日、歴觀神祠、至城隍廟延壽司。捧香合女像而有黒油。以語廟祝毀之、中有血水流出。

【書き下し文】

姑蘇の衛人王宗本、汴に行賈す。夜に抵たり、美女の室に入りて与に狎るる有り。其の居止名氏を詢ふも、終に言はず。久しくして疾を成し、妖なるかと疑ふ。來る時を俟ち、黒油を以て其の面に塗れば、女泣きて去りぬ。

旦日、神祠を歴觀するに、城隍廟の延壽司に至る。香合を捧ぐる女像に黒油有り。以て廟祝に語りて之を毀つに、中に血水の流出する有り。

【語注】

「姑蘇」……地名。今の江蘇省蘇州市。

「衛人」……門番。

「行賈」……店を構えず、往来して品物を売ること。

「汴」……河南省開封の別名。

「抵」……ある場所や時期に相当する。

「狎」……親しくする。近づく。

「詢」……問う。意見を求める。

「居止」……住居。居址。

「俟」……待ちうける。

「旦日」……翌日。

「歴観」……次から次へとめぐり歩いてみる。

「城隍廟」……城の堀や都市の守り神を祀ったほこら。

「延寿司」……長命・延年することを願うほこら。

「香合」……香料を入れる箱。

「廟祝」……廟の主人。

【現代日本語訳】

姑蘇の護衛をしていた王宗本は、汴京に買い物に出掛けた。夜になり、美女が部屋に入ってきて親密な仲となった。宗本は、女に住んでいる所と氏名を尋ねたが、彼女はとうとう答えないままであった。しばらくして宗本は病にかかり、女がものけではないかと疑った。女が訪れるのを待って、顔に黒い油を塗ったところ、女は泣いて去ってしまった。

翌日、神祠を見物しつつ歩いていると、城隍廟の延寿司にたどり着いた。(その場所の) 香を入れる箱を捧げ持つ女の像に黒い油がついていた。そこで廟の主人に話し、この女像を壊したところ、中から

血があふれ出てきた。

【補説】

この話は、王宗本が旅先で親密な関係になった美女を妖怪の類ではないかと疑い、女の顔に目印として黒油を塗ったところ、城隍廟の香合を捧げ持っていた女像に自分の塗った黒油がついていたという話である。

ここで現れる城隍神とは都市の守護神であり、城隍神を祭る行為には南方沿岸地方における地方的風俗に起源があるとされ、現在でも、中国や台湾にて信仰されており、毎年五月二十一日を城隍神の誕生日とし、盛大な祭典が行われている。

宋代の城隍神は、地方官にとつては社稷などに並んで、春祈秋報や祈雨祈晴祈願を行うために国家によって祭祀される神であった。その一方で民間信仰においては、城隍神は冥界神と見なされており、宋代の道教思想の広まりと冥界神信仰が結びつき、城隍神の性格・役割に「道士の呪術によって呼び出され、地域の鬼神の取り締まりを行うあの世の警察的存在」が付加された。また城隍神内の権力差が成立し、「都城隍↓州城隍↓県城隍」というようになっていた。宋代の道教において、いち早く城隍のヒエラルキーが出来上がっていたこと、亡魂の取り締まりという役割が確立していたことがわかる。

『情史』が書かれた明代には、城隍神が生者や亡魂に対して監督し、その善悪に従って報いを受けるようにはからうという役割を担う事になる。そこから次第に城隍神が出巡することにより、彼らの活動を取り締まるという形になっていったようだ。後にその形式を模して、神像を神輿に乗せて城内を巡行する「城隍出巡」という行事が民間でも行われるようになり、現在でも台湾の「台北霞海城隍廟」「新竹城隍廟」の出巡は有名で全島から信者があつまるとなる祭典となっている。

また明代の民間主体の城隍神信仰の中には、天罰を下し運命を変化させるといふ城隍神の役割から派生し、人に眼福を与えることができる神としてみなされた。本来の冥界神としての信仰から変化が生じ、病の回復を祈ったり、福を祈ったりするために、城隍神に家畜をささげ祈祷したという民間信仰もみられる。この物語の中にも、城隍廟の中に延寿司という長寿を願う祠がある。おそらく、民間信仰において病の回復などを祈願する場所であるのではないだろうか。

城隍神が生者や亡魂に対して監督する神であることは先に述べた。王宗本が親密にしていた美女とは、おそらく城隍廟の延寿を司る祠の中で、女像として管理されていた亡魂・鬼神の化けたものであることが考えられる。

〔参考文献〕松本浩一「城隍神信仰とその源流」(『図書館情報メディア研究』第一巻二号二〇〇三)

(柴田 早侑里)

⑥『情史』巻二十二 情外類 第三話「王确」

【本文】

王僧達為吳郡太守、族子确少美容。僧達与之私款甚昵。确叔父休、永嘉太守、当将确之郡、僧達欲逼留之。确知其意、避不往。僧達潛于所住後作大坑、欲誘确来、殺埋之。従弟僧虔知其謀、禁訶乃止。

【書き下し文】

王僧達は吳郡の太守たりて、族子确かくわか少くして美たる姿あり。僧達之と私款すること甚だ昵なり。确の叔父休、永嘉の太守となりて、当に确をひま將めて郡に之ゆかんとするに、僧達ま逼りて之を留めんと欲す。确其の意を知り、避けて往かず。僧達ひま潛かに住みたる所の後に大坑を作り、确を誘ひて来たらしめ、殺して之を埋めんと欲す。従弟の僧虔其

の謀を知りて、禁訶して乃ち止めしむ。

【現代日本語訳】

王僧達は吳郡の太守で、甥の确は若くて容姿は美しく、僧達は确と非常に親密に交わっていた。确の叔父の休は、永嘉の太守となり、确を永嘉に連れて行くとしたところ、僧達は脅して确を留めようとした。确は僧達がそのように思っているのを知り、避けて僧達のもとに行かなかった。僧達はこっそりと住居の裏に大きな穴を作り、确を誘って招き入れ、确を殺して埋めようとした。従弟の僧虔が僧達の謀を知って、大声で制止したので僧達は計画をとりやめた。

【語注】

「王僧達」……四三/四六。南朝宋の人。若いころから文才をふるったが、性格に難があり、改善が見られなかったため、死を賜った。この逸話は『宋書』王僧達の本伝に見える。

「吳郡」……郡名。現在の江蘇省蘇州市。

「族子」……親類の子供。兄弟の子。おい・めい。

「私款」……密かに親密に交わる。

「昵」……親密なさま。

「永嘉」……郡名。現在の浙江省温州市。

「将」……携行する。ともなう。

「逼」……おどしつける。脅迫する。

「潛于所住後」……『宋書』王僧達は「潛於所住屋後作大坑」に作る。

「王僧虔」……四六/四五。南朝宋、齊の人。

「禁訶」……大声で制止する。

【補説】

この話は、王僧達と王确の二人の男色の話であり、『宋書』王僧達の

本伝に見える。同性愛は様々な史書に見られるが、最古のものは、『商書』(『書経』のうち、商代(殷代)のことを記した部分)の「伊訓」とされる。ここでは、同性愛は悪行であるというように述べてある。

しかし後世では、『戦国策』「秦策」に男色が一国の君主の遊び楽しむ方法や特別な嗜好になっていたことがわかる記述がある。また、そのほかの多くの書の描写でも君主が美男子に入れ込み、官職を与えたり、その一族を優遇したりといったことが実際に行われており、その行き過ぎたものとして帝位を禅譲するほどに入れ込んでしまう皇帝がいたという記述さえもみられる。しかし、彼らは主にその美貌で君主を喜ばせたので、その地位は非常に不安定であり、容色が衰えて寵愛を失うか、君主がほかの男を好きになれば、不幸な目に合うこともしばしばあった。しかし、このように男色を好んだ君主たちは、同性愛者というわけではなく、両性愛者であって、美女に飽きると趣向を変えて美男をもてあそんだのである。

なお、『情史』が編纂された明代には、男色が非常に盛んであった。というのは、明代というのは中国史上もっとも性的抑圧が最も厳しい時代であったことが原因にあげられる。このような厳しい性的抑圧は、古代の中国人の一族や家庭の觀念の強さに起因しており、男女が接触することに於いては、一族の血統や家庭の秩序を乱す可能性があるため、きわめて厳格に制限されていた。そのため、性欲を円滑に解消する手段がなかった。しかし、同性愛はこれらのような問題が起きる心配がないため、社会は異性との性行為を統制すると同時に、同性愛については緩和したのである。

このような背景を持つ男色・同性愛であるが、この物語では目上の相手が美男子を棄てるのではなく、美男子が目上の相手を棄てるというように描かれている。王僧達は激昂し、寵愛していた王確を殺そう

とする。結局、彼は王僧虔に叱責されて王確を殺すことはないのだが、この物語で描かれようとしているのは、王僧達がどのような人物だったのかという点だと考えられるだろう。彼は、実際にも性格に難があり、それによって幾度も官職を剥奪されている。この物語でも自分の思い通りにならなかつたら寵愛していた者でさえも殺そうとするほど気性が荒く描かれている。このような問題のある彼の人間性を、先述したように男色と絡めて描こうとしたのではないだろうか。

【参考文献】劉達臨著 鈴木博訳『中国性愛文化』(青土社 二〇〇二)

(梅 誠士郎)

⑦『情史』卷二十三 情通類 第十話「鶴」

【本文】

高郵有鶴、双栖于南楼之上。或弋其雄、雌独孤栖。旬余、有鶴一班、偕一雄与共巢。若媒誘之者。然竟日弗偶、遂皆飞去。孤者哀鳴不已、忽鑽隙入巢隙、懸足而死。

時游者群客見之、無不嗟訝、稱為烈鶴、而競為詩歌吊之。復有烈鶴碑。

【書き下し文】

高郵に鶴有りて、南楼の上に双栖す。或ひと其の雄を弋し、雌独り孤栖するのみ。旬余にして、鶴の一班有りて、一雄と偕に巢を共にす。之を媒誘する者の若し。然れども日を竟ふるまで偶せず、遂に皆飛び去る。孤者哀鳴して已まず、忽ち隙を鑽りて巢隙に入れ、足を懸けて死す。

時に游者群客は之を見、嗟訝せざる無く、稱して烈鶴と為し、競ひて詩歌を為し之に吊す。復た烈鶴碑有り。

【語注】

「高郵」…県名。現在の江蘇省高郵市。

「鶴」……コウノトリ科の大形の鳥の総称。

「南楼」……南にある二階、または二階建て以上の建築物。

「七」……いぐるみ(鳥を絡め取るために糸をつけた短い矢)で捕える。

「旬余」……十日あまり。

「班」……グループ。

「偕」……一緒に、ともに。

「媒誘」……女性に男性を仲立ちする、または女性を誘惑すること。

「竟日」……一日じゅう、終日。

「偶」……結婚する、連れ添う。

「鑽」……キリで穴をあける。

「嗟訝」……感嘆し不思議に思う。

「烈」……激しい。意志が固い。

【現代日本語訳】

高郵に鶴がおり、南の高殿の上につがいで棲んでいた。ある人がその雄を捕えたため、雌はただ独りで棲んでいた。それから十日余り、(雌のもとには)鶴のグループがあつて、順番に一羽ずつ雄と巢を共にした。それはまるで結婚させようと仲立ちしたり、誘惑したりする者のようだったが、それでも一日中連れ添うことがなかったので、遂に皆鶴の群れは飛び去っていった。一羽になった雌の鶴の悲しい鳴き声はやむことがなく、急にきりで穴をあけるように嘴を巢に突き刺して、足を天にかけるようにして死んでしまった。

そのとき、旅ゆく者や連れだつて旅客たちがこれを見て、感嘆し奇

異なことだと思わないものはおらず、激烈で意志の固い鶴であるとして、競い合つて詩歌を作り、その場所に詩歌を吊した。さらに烈鶴碑という碑文もあつた。

【補説】

これは夫がいなくなった後も夫への愛情から他の雄と連れ添うことなく亡くなった鶴の話である。「烈鶴碑」というものが他の文献に見られず、類話が見つからないことから、この話自体は民間伝承の一つかと考えられるが、操を立てようとする人間の女性の話を鳥に例えている作品は他にも存在する。

夫亡き後、次々とやってくる雄たちや、他の雄と結婚させようとしてくる者がいても、決して受け入れなかった雌の様子からは夫への深い愛情を読み取ることができる。別の雄が来るたびに夫への恋しさや夫はもういないのだという寂しさがさらに募り、遂に群れが飛び去つて、独りになってからは、より一層夫の事が思い出されたのだろう。

そのような深い悲しみに耐えきれなくなった結果が、「忽鑽嘴入巢隙、懸足而死」という壮絶な死につながっている。

最後に「烈鶴碑」という碑文もある、とされているが、この「烈」には、このような激しい死に方や、先に述べた夫への愛情の深さ、また夫の為に貞操を守ろうとする意志の固さなど合わせて、ここでは「烈」と表現されているのである。

また、雌の鶴を媒誘しようとする雄たちの様子や、雌が独り悲しむ様子、壮絶な死に方、それを見た旅人の様子など、描写がリアルな点もこの作品の面白さであろう。(柴田 深月)

⑧『情史』巻二十三 情通類 第十三話「象」

【本文】

日南貢四象、各有雌雄。其一雌死于九貢、至南海百有余日、其雄泥土着身、独不飲酒食肉。長史問其所以、輒流涕焉。

【書き下し文】

日南四象を貢ぐに、各雌雄有り。其の一雌九貢に死し、南海に至ること百有余日、其の雄は泥土もて身に着け、独り飲酒食肉せず。長史其の所以を問へば、輒ち涕を流す。

【語注】

「日南」…郡名。秦代に象郡とされたが、秦末の混乱により南越国が成立し、この地を支配していた。新朝が成立すると、一時日南亭と改称されたが、後漢により日南郡の名称に戻されている。南北朝時代になると日南郡全域を支配下に置き、日南郡は消滅した。

「九貢」…地域の貢物を献上する制度。しかし、ここでは、文脈から推察するに地名であるように思われる。しかし、九貢という地名に該当するものがない。日南郡と南海郡とのちょうど中間に九真郡があり、或いは「貢」は「真」の誤りか。

「南海」…郡名。現在の広東省広州市。

「長史」…官名。漢では相国、または三公の下役。ここでは、南海における長史であるので、太守に次ぐ役職にあたるか。

「輒」…すなわち。そのたびごとに。もっぱら。

【現代日本語訳】

日南郡が四頭の象を貢ぎ、それぞれ雌と雄のつがいであった。そのうち一頭の雌が九貢で死んでから、南海に至るまで百日ほどの日、その雄は泥や土を体に付け、一頭だけ酒も飲まず、肉も食べなかった（食事などで楽しむことをしなかった）。長史がその訳を尋ねると、その

たびごとに涙を流した。

【補説】

貢物として運ばれていた象のうちの一頭の雌が死に、それに対して雄の象は、その死を嘆き悲しんでいる。その様子を象がまるで人間であるかのように表現することで、象が感情を持った存在として描き出そうとしている。

現代では、象が土や泥を身に付ける行動は、ダニを取り払ったり日焼けを防止するためであるとされているが、当時の人々はその行動を悲しみによって取り乱している、或いは喪に服す儀式のようなものとして捉えたのではないだろうか。実際に、前漢ごろから中国においても儒家思想に基づく喪の概念があったとされており、その概要は酒肉を断ち、三年間喪に服すといったものである。そもそも象は酒も飲まないし、肉も食べない生き物であるが、ここで飲酒食肉と表現されているのは、象を人間と重ね合わせているからであろう。酒を飲み、肉を食べる、つまり宴の席でも、喪に服しているため一人仲間の死を悲しみ、楽しむことができないといった様子である。

また、この話が収められている情通類は、この話以外にも動物や植物が感情を持っているように描こうとしているものが多数ある。それらは単に感情を持った存在として動植物を取り上げることとどまらず、人間と重ね合わせることで、人間に極めて近い存在であることを表現しているようである。

(是友 諒介)

◎『情史』巻二十三 情通類 第三十七話「相思子」

【本文】

豆有円而紅、其首烏者。名曰相思子、即紅豆之異名也。生于樹。其木斜斫之有文、可為博具及琵琶槽。其花与皂莢不殊。

子猶曰、「因古人有血淚事、因呼涙為紅豆。相思則流涙。故又名紅豆為相思子。」

【書き下し文】

豆に円くして紅く、其の首の烏き者有り。名を相思子と曰ひ、即ち紅豆の異名なり。樹に生ず。其の木斜めに之を斫れば文有りて、博具及び琵琶槽と為すべし。其の花は皂莢と殊ならず。

子猶曰はく、「古人の血涙の事有るに因り、因りて涙を呼びて紅豆と為す。相思へば則ち涙を流す。故に又紅豆を名づけて相思子と為す。」と。

【語注】

「相思子」…樹木の名。豆科のつる性常緑樹。羽状複葉を互生。花は赤や紫。扁平な果実を結ぶ。種子は赤色で一端が黒く、美しいため装飾用にも用いられるが、毒性を持つ。別名に「紅豆」などがあり、日本名は「唐小豆」。

「首」……頭。前部。

「烏」……（からすのように）色が黒いさま。

「文」……美しい模様。

「博具」……賭博道具。岳麓書社本は「博局」（碁盤）に作る。

「琵琶槽」……ことじ。琵琶の弦を支え、その位置によつて音の高低を調節するもの。

「皂莢」……樹木の名。さいかち。豆科に属す。葉は羽状複葉。花は黄色。果実は扁平台形の莢（さや）。種子は薬用となる。

【現代日本語訳】

豆の中でも丸く赤いもので、頭の部分が黒くなっているものがある。

名前を相思子と言つて、それは（いわゆる）「紅豆」の別の名前である。（その豆は）木に実る。その木は斜めに切ると美しい模様が現れるので、賭博の道具や琵琶のことじなどにすることができると。その花は皂莢と変わらない。

子猶氏が言うには、「昔の人に血の涙の故事があるのに由来して、涙のことを紅豆と呼んでいた。（さらに）相手のことを思うと、そこで涙は流れるものだから、また紅豆の名を相思子とするのである」と。

【補説】

日本においては「唐小豆」と呼ばれる、鮮やかな赤と黒のコントラストが美しい豆がある。その果実が中国において「相思子」と呼ばれる所以が、「血涙の事」にあると説明されている話である。子猶氏が具体的にどのような故事を指しているのかは明らかではないが、中国には血の涙が流れたという話がいくつか残っている。

その一つに戦国時代の思想書『韓非子』に収められる和氏の逸話がある。楚の人和氏が宝玉を発見し、王に献上しようとしたものの、玉人の目利きによつて偽物と判断され、足を切られた。王が交代すると、再び献上しようとしたが同様であった。正直であるのに、たばかり者であるとされたことに深く悲しみ三日三晩泣き続けたとき、涙が尽き血涙を流したという。（三日三夜、涙尽きて之に血を以つてす）また、中国五十六の民族の一つ、雲南省の彝族には、次のような伝承が残る。

雲南省の山奥に白い花が一面に咲いていた。ミールという美しい娘が、その花園で歌っていると、若い男が恋をした。しかし、その地を支配する首領がミールの美貌を聞き、結婚を迫った。強引に連れ去られる途中、ミールは白い花園に散っていた花びらを拾って髪にさし

た。婚礼の式で覚悟を決めたミールは花びらを浮かべた酒を首領にすすめ、自らも飲んで自殺した。若い男はミールの遺体を抱き、思い出の白い森に入った。若者の涙は悲しさで血となり、白い花を朱に染め、「桜」が生まれた。

イ族では「桜」を「ミール」と発音し、この桜誕生の悲話を伝えているという。

涙が尽きたとして、次に体内から流れ得る液体として「血」が想起されるのは不思議ではないだろう。涙が尽きたとしても尽きることはない痛々しいほどの悲しみを表すものが血の涙であった。また、その赤い小さな粒は鮮やかな赤をもつ豆粒に例えられるようになった。次第に人々はその涙から、人を悩ましくさせる「相思」の心を連想させたというのである。

また、この豆は時に、詩の題材ともなった。

「相思」王維

紅豆生南国 春来發幾枝

願君多采擷 此物最相思

紅豆は南の国のもの

春になると幾つかの枝に実をつける

君よ、うんと沢山摘み給え

これは恋の豆、人思う気持ちさをさそうものだから

(松枝茂夫『中国名詩選』岩波文庫一九八三)

右に挙げたのは盛唐の詩人王維の作品である。相手が「紅豆」を摘むことよって自分を思ってくれることを期待している様子がかがえる。ただし、ここで読まれる「相思子」は、明らかに美しい愛情のモチーフとして登場する。

このように植物に何かを象徴させるといふことは、相思子に限らず多々ある。それは中国だけでなく、桜から儂さを、向日葵から明朗さを読み取るなど現代の私たちにおいても同様に行われている。古来中国では、桃の花からは美人を想起し、菊には隠遁の思いや高尚さが、月が原産と信じられた金木犀(桂花)には幸運・富貴・立身出世と言ったイメージが託されるなどしていたという。この「相思子」からは、赤い色が想起させる激しい悲しみと、相手を思う深い愛情の両方を読み取ることができ、二つのイメージが重ねられて存在しているのである。

〔参考文献〕王敏『花が語る中国の心 美女・美酒・美食の饗宴』(中公新書 一九八五)

公新書 一九八五)

(糸山 由樹)

⑩『情史』巻二十四 情迹類 第一話「情尽橋」

【本文】

折柳橋、在簡県。初名情尽橋。雍陶典雅州、日送客至其地、向左右曰、「送迎之地止此。故名」。陶命筆題其柱曰「折柳」。因賦詩曰、

「從來只説情無尽、何事教名情尽橋。自此改名為折柳、任教離恨一条。」

自後送別、必吟是詩。

【書き下し文】

折柳橋、簡県に在り。初め情尽橋と名づく。雍陶雅州を典^{つかさ}り、日に客を送りて其の地に至り、左右に向かひて曰はく、「送迎の地此に止まる。故に名づくるならん」と。陶筆を命じて其の柱に題して曰はく「折柳」と。因りて詩を賦して曰はく、「從來只だ情尽きる無しのみと説くに、何事か情尽橋と名づけしむ。此れより名を改めて折柳と

為す、離恨一条の条に任教せん」と。

自後送別するに、必ず是の詩を吟ず。

【語注】

「折柳」……柳の枝を折ってはなむけとする。送別。はなむけ。

「簡県」……県名。現在の中国四川省簡陽市。

「雍陶」……中唐の詩人。八〇五?。字は国鈞。地方刺史を歴任した。

「典」……統括する。管理する。

「雅州」……州名。現在の中国四川省雅安市。

「日」……ある日。

「左右」……左右にいる人の意味。

「命筆」……(左右に筆を持ってこさせて書くことから)筆をとる。

「只」……限定の意ではなく、「専ら」という意味。

「任教」……そのままにまかせる。

「離恨」……別れの悲しみ。

「一条条」……細長い柳一枝を指す。

「自後」……その後。

【現代日本語訳】

折柳橋は簡県にあり、当初情尽橋と名付けられた。雍陶が雅州を統轄して、ある日、訪問してきた人を見送ってその場所(情尽橋)までやってきて、そばにいる人に対して言うことには、「送迎の場所はここまでだ。よって(情尽橋と)名が付いたのだろう。」と。雍陶が筆をとり、その(橋の)柱に「折柳」と書き記した。そして詩を作ったことには、「これまで(離別の時は)ただただ情が尽きないと語ってきたのに、何故情尽橋と名付けられたのだろうか。これより名を改めて折柳橋としよう。そして別れの悲しみが柳の細長い枝のよ

うに長く続くままに任せよう。」と。

それからのち人を見送る際には、必ずこの詩を詠じるようになった。

【補説】

この話では、もともと情尽橋と呼ばれていた橋が、何故折柳橋と呼ばれるようになったのかについて語られている。名前が変わった原因は雍陶が賦した詩に示されているのだが、その詩において雍陶は、これまで情は尽きないと言われているのに、別れの場所で「情」が「尽きる」橋としてしまうのはおかしいとする。

ここで雍陶は、人の心のありように注目して橋の名前の不適切さを指摘している。「情尽」では、別れの際の名残惜しさ・悲しみといった情がすぐ立ち消えてしまうような薄情さが感じられてしまう。詩中「任教離恨一条条」が示すように、別れの悲しみは柳の枝のように細く長く続くが、別離に際しては折ってしまうしかない。そこで「折柳」と変更することにより、別れの名残惜しさを感じるができる。この雍陶の逸話は『唐才子伝』に見える。ここでは、折柳は古楽府の「折楊柳」から名をとったとされされており、楽府「折楊柳」は従来、望郷の念を起させるものと解釈されている。しかし、雍陶の「折柳」の解釈は、これと異なった、独自のものとなっている。

【参考】『唐才子伝』巻五「雍陶」(部分)

(本文)

後為雅州刺史。郭外有情尽橋、乃分衿祖別之所、因送客。陶怪之、遂於上立候館、改名折柳橋。取古楽府折楊柳之義。題詩曰、「從來只有情難尽、何事呼為情尽橋。自此改名為折柳、任他離恨一籊籊。」甚膾炙當時。

(書き下し文)

後に雅州刺史と為る。郭外に情尽橋有り、乃ち衿を分かちて祖別するの所にして、因りて客を送る。陶之を怪しみ、遂に上に候館を立てて、名を折柳橋に改む。古楽府折楊柳の義を取るなり。詩を題して曰はく、「従来は只だ情の尽き難きことのみあり、何事ぞ呼びて情尽くるの橋と為すは。此れより名を改めて折柳と為し、他の離恨一篠の篠に任せん。」と。甚だ当時に膾炙す。

(現代日本語訳)

のち雅州の刺史となった。そのときのこと、城郭の外に情尽橋という橋があり、そこは別れの場所で、ここで人を見送ったのであるが、陶は情尽という名をいぶかり、そこで橋のたもとに候館を建て、橋の名を折柳橋と改めた。古楽府の「折楊柳」の義を取ったのである。そしてつぎの詩をしるした、「従来は只だ情の尽き難きことのみあり、何事ぞ呼びて情尽くるの橋となすは。此れより名を改めて折柳と為し、他の離恨一篠の篠に任せん。」当時はなほだ賞賛されたものである。

〔参考文献〕布目潮風・中村喬『唐才子伝之研究』(汲古書院 一九九

二)

(村上真麻)